

ハイディ (第三回)

東京女子高等師範學校教授 津田芳雄譯

さうしてゐるうちにもう夕方になつた。するご、今度は古い樅の木にあたる山風の音が高くなつてきた。ハイディはそれを悦んで聴いてゐたが、やがて嬉しくて堪らなくなつたらしい。樅の木のまはりをスキップしたりダンスしたりして廻りだした。おぢいさんはそれをじつと小舍から眺めてゐた。

そこへ突然鋭い口笛が聞えた。ハイディはスキ

ップを止め、おぢいさんも外へ出で見るご、上の山から山羊やペーテルが現れた。ハイディは聲をあげて喜び、跳んでいつて朝のお友達に次々と挨拶をした。それから、その中の一匹は白、一匹は薔薇色の、美しい、すらりとした二匹の山羊が、お

ぢいさんの所へ駆けよつて手を嘗め始めた。これはおぢいさんが鹽を少し手に持つてゐたからで、おぢいさんは自分の山羊が歸つて來る時にはいつも鹽を手にして待つてゐるのであつた。ペーテルは間もなく、あとの山羊たちをつれて麓の村の方へ下りて行つた。ハイディは残つた二匹の山羊に代るゝ跳びついていつては、それをなで廻して悦んだ。

「おぢいさん、これうちの? 二匹ともうちの? 小舍に入れるの? 何時までもうちだるるの?」

ハイディがあんまり早口に色々なことを問掛けるので、おぢいさんは唯「さうだ、さうだ」と答へる。これが出来るだけであつた。山羊たちが鹽を嘗

めてしまふ」おぢいさんはハイディに「お椀さパンを持つておいで」と云つた。

ハイディがそれを持つて来る。おぢいさんは白い山羊から、そのお椀に一杯、乳を搾しぼつて、パンを一きれ裂いて添へながら「さあ晩御飯だよ。それが終つたらおやすみよ。おぢいさんはこれから山羊を小舍に入れて來なけれやならんからね。それからお寝巻チャキやなんか戸棚の一番下に這入つてゐるよ。データがそんな物の入つた包を今一つ置いて行つたからね。」

「おやすみ。おぢいさん、おやすみ」それから、おぢいさんや山羊たちを追掛けながら「山羊たちの名前、何ていふの、おぢいさん。山羊たちの名前は？」とハイディは叫んだ。

「白い方が白鳥でね、薺色アカモトの方が小熊だ。」

「おぢいさんは答へた。ハイディは

「白鳥、おやすみ。小熊おやすみ」山羊たちはもう小舍に入つたので、今度は出るだけの高い聲を出してさう叫んだ。それから腰掛に腰を下して晩

御飯を食べにかゝつた。けれども風が強くて吹き飛ばされさうだつたので、それもさつさとすまして家に入り、寝床に上つた。そして間もなく絹の櫛に包まれる姫様のやうに、すや／＼ミいゝ心持に眠つてしまつた。

やがて、おぢいさんも、まだ暮れてしまはないうちに寝床に入つた。毎朝、日の出と一緒に起きるこゝにしてゐるのに、夏の山の上の日の出は非常に早いからであつた。夜になるごと風が段々激しくなつて、家が震へたり、梁ハリが鳴つたり、煙突をピュ／＼吹き下す音や、樅の木の小枝がボキボキ折れる音なき物凄く響いてきた。おぢいさんは「子供は怖いだらう」と云つて、夜中に起きあがつて、梯子をのぼり、ハイディの寝床の所へ行つて見た。

外では、黒い走り雲の間に、見えたり隠れたりしてゐた月が、丁度その時雲を離れて、圓窓から月の光が流れ込むやうにしてハイディの寝床を照した。見るごハイディは厚い薄團の下に體を被ふ

て、薔薇色の頬をしながら、小さい圓い腕の上に頭をのつけて、何か嬉しい夢でも見てゐるやうな顔して、すやく眠つてゐるではないか。おぢいさんは、月がまた雲に隠れて、何にも見えなくなるまでそれを眺め入つた。それから自分の寝床へもどつて行つたのだつた。

三、山羊さんようと山さん

翌朝、ハイディはベーテルの高い口笛に眼をさました。枕もこの圓窓からはもう日が一杯さし込んでゐて、寝床も、枯草も、そのほか屋根裏ち

うのものが金色に光つてゐた。ハイディは吃驚してあたりを見廻しながら、此處はここだらうと思つた。が、直ぐに外でおぢいさんの太い聲がするのを聞きつけて、山のおぢいさんの家に來てゐることに氣がついた。それから、昨日からの色んな珍しいことを思ひだして、今まで聲こゑの老婆さんに預けられて、街の狹苦しい家の中にはかりゆさせられたことゝ引くらべ、嬉しくて堪らなくなつた。早速、彼女は寝床から飛びだした。そして急いで

着換へをし、梯子を下りて、家の外へ駆けだした。するご、そこにはもうベーテルが山羊たちをつれてゐて、おぢいさんは自分の二匹の山羊を小舎からつれ出してゐる所だつた。ハイディは駆けつけて行つて、おぢいさんやみんなに「お早う」を云つた。するご、おぢいさんがハイディに

「おまへ、山羊さんようひつしょに山さんへ行くかね。」

と尋ねた。ハイディにはこんな願つたりかなつたりなことはなかつた。彼女は飛び立つて喜んで見せた。

「だが先づお顔でも洗つて、きれいにしないとお日様に笑はれるよ。それ、あすこにみんな捕つてゐる。」

さう云つておぢいさんは家の入口にある水の一杯入つた鹽しお、そのそばに懸つたタオルの方を指して見せた。ハイディがそこへ行つて顔を洗つたり、首や腕を拭いたりして居るあひだに、おぢいさんはベーテルに弁當袋をもつて來るやうにさ云つて家中へ入つた。ベーテルは何するのかと思

ひながらそれをもつて行く。おぢいさんはパンの大きなきれい、それと同じ位のチーズを入れてくれたので、ペーテルは眼をまるくした。

「まあ、あとはお椀を一つ入れるだけだ。あの子はおまへみたいに、乳首からちかには飲めないから、お辦當の時に、このお椀に二杯ほど乳を搾つてやつてくれ。今日はおまへと一緒にあの子も行くんだ。岩から落つこちないやうに氣をつけてやるんだぞ、いゝか。」

そこへハイディがお日様から笑はれないやうに、さんざんこすつて蟹みたいに赤くなつてやつて來た。

「おぢいさん、もうお日様、笑はないね。」

「もう大丈夫。さあ行つこいで。」

ハイディは大悦びで山へ出かけた。昨夜の風で、雲はすつかり吹き拂はれて、頭の上には紺色の空がひろがり、その中から輝く太陽が、山の緑の斜面を一杯に照らしつけてゐた。そしてその斜面には、小さい青いコップや黄色いコップに見える花

が數知れず開いてゐて、空の太陽の方へほゝゑみかけてゐた。ハイディはあちらに走り、こちらに走りして聲を立てゝ悦んだ。それも、こちらには赤い優しい櫻草が一面に咲いて居り、あちらには可愛いゝりんどうが青く光つて居り、その上手の方にはまた、柔い葉をした金色の木犀草が笑つてうなづいてゐたりしたのだから無理はない。ハイディはこの波打つてゐる色鮮やかな花の原に氣も心も奪はれて、ペーテルや山羊たちのここまで忘れてしまつた。彼女は美しい場所に目を引かれるまゝに、先に走つて進んだり、脇に外れたりしては、始終、花を手に一杯摘んで小さい前掛に入れられた。彼女はそれをみんな持つて歸つて、枯草にさして、自分の寝室をこの野原のやうに見せたい積りなのだった。それでペーテルは油斷も隙もならなかつた。あまり速くも動かないその圓い眼が廻つてしまふ程、ひきい目にあつた。それに山羊共までハイディと同じやうな元氣を出して、勝手な方角へ走つて行くので、ペーテルはそれを

集めて行く爲に、始終口笛を鳴らしたり、大聲を出したり、杖を振つたりして追つて行かなければならなかつた。彼は少し怒つたやうに

「ハイディー！ ハーテル？」

『呼んだ。する』

「トトトよ。」

『おからか聲がするが、姿が見えない。ハイディは、匂ひのいゝうっぽぐさに蔽はれた低い丘の裾にゐるのだつた。そしてそこに坐つて花にうづもれながら、生れて初めて嗅ぐいゝ香りをのせた空氣を、胸一杯に吸ひ込んでゐるのだつた。

「トトちへ來いよ。岩からおつこちちやいけないミ、アルムおぢさんが云つたよ。』
ペーテルはまたさう叫んだ。

「岩はそこにあるの？」

ハイディは訊ね返した。けれども花の香りが風の吹毎によくなつてゐるやうな氣がして、席から立たうとはしない。

『あの上の方さ。まつすぐ上に行つた所だ。僕た

ちは、まだすつゞ先まで行かなくちやならのだよ。早くおいで。一番高い峯には大きな怖いみたいな鳥がゐて、鳴いてみせるよ。』

それを聞いてハイディは直ぐに立上り、花を一杯入れた前掛をかゝへながらペーテルの所へ駆けて來た。

『隨分さつたね。花をこりだしたら、きりがなくて、いつまでたつても此處から動けはしないよ。それに今日さつてしまつたら明日のが無くなつてしまふぢやないかみんなが。』

また登りはじめた時にペーテルがかう云ふミ、ハイディもまた明日のが無くなるやうに揃んでしまつては本當にいけないと思つた。それに前掛ももう一杯で、それ以上這入らなくなつてゐたので、ハイディはそれからはペーテルのそばを離れなくなつた。山羊たちも上方の好きな草の匂ひを嗅ぎだして、おごなしくさつき登るやうになつた。ペーテルが普通、一日中山羊を遊ばせてゐた所は、高い岩山の麓になつた高臺めいた斜面の所で、そ

の高い岩山にも裾の方には藪や樅の木が一杯茂つてゐた。しかしこの高臺の一方の側には岩の深い裂目が幾つかあつて、おぢいさんが危いことをつけさせたのも道理に思はれた。この休み場まで來るご、ペーテルは辨當袋を肩からおろして、それを地面の少し窪んだ所に大事に置いた。山の上は風が強いので、氣をつけない大事の物を突風にさらはれて、こんでもない下まで吹き落されてしまふこになる。その邊のこはペーテルも心得たものだつた。それから彼はさすがに疲れてしまつて、温い草の上にのびくく寝そべつた。

同時にハイディも前掛をはづして、それで花をくるんで、ペーテルの辨當袋の脇の窪地に置いた。それから寝そべつたペーテルのそばに自分もさつき坐り込んで、あたりの景色を見廻した。するご、谷はすつと下まで朝日を浴びてゐる。眞前には大きな雪の山が紺色の空に高く聳えてゐる。

左の方には岩又岩がそば立つてゐて、その兩側からまた、青空を突きぬくやつにして、高い高い

峰が寄りつけない様子で自分を見下してゐる。ハイディはこれら景色に眺め入つて身動きもしなかつた。あたりはしいんとして、たゞ折々軽い風の音がして、青い花の小さい鈴や、木犀草の金色の冠がゆれて、その細い莖と一緒に陽氣にうなづいてゐるだけ。ペーテルは疲れて眠つてしまつたし、山羊は好き自由に上方の藪の中を歩き廻つてゐる。ハイディは今までこれほぞ樂しい思ひをしたこはなかつた。彼女は金色の日光や、新鮮な空氣、花の匂ひやを吸ひ込んで、かうしてこゝにいつまでもゐることよりほかに、何にも望むこはなかつた。さうして時が過ぎて行くうちに、今まで何度もゐることよりほかに、何にも望むこも見るやうに自分を見下してゐるのではないかと思はれて來た。そこへ突然耳を打つやうな鋭い聲が頭の上にしたので、驚いて眼をあげるご、見たこゝもない程大きな鳥が、大きな翼をひろげて、空に輪を描きながら鳴いてゐるではないか。

「ペーテル、ペーテル。起きなさいよ。」

ハイディは叫んだ。「あれ御覽、大きな鳥がるてよ。ほら、ほら。」

ペーテル呼びさまされて起き上り、一緒に鳥を眺めた。鳥はます／＼高く舞ひあがつて、灰色の山の頂のむかふへ隠れてしまつた。

「鳥はどこへ行つたの。」

「巣に歸つたんだよ。」

「あんな高い所に巣があるの。すてきねえ。なんだつてあんな聲をして鳴くのかしら。」

「鳴かずにあるられないからさ。」

「わたしたちも、そこへ登つて行つて、巣を見つけない？」

「おほー、おや、おや、山羊だつてあんな所まで登れやしないよ。それにアルムおぢさんが岩から落こちないやうにつて、云つたぢやないか」

それからペーテルが急に口笛を吹いたり、大聲に呼んだりしだした。ハイディには何のことか分らなかつたが、山羊たちはそれを聞きつけて、岩

を跳び下りて、みんな縁の高臺の所へ集つて來た。そしてその山羊たちが、めい／＼勝手に、相變らず水氣のある草の莖なぎをかぢつてゐたり、あちらこちら跳び廻つたり、角で突きあひつゝをして巫山^{フサ}で見せたりするのだつた。

ハイディには山羊たちがそんなにして遊ぶのを見るのは初めてだつたので、自分も直ぐにこびだして行つて、その中に加はつた。そして一緒にじやれる時の面白さつたらなかつた。ハイディはもう山羊たちめい／＼の癖が分つて、ひざりびざりのお友達みたいに見分けがついて、山羊たちみんな仲好になつた。一方ペーテルは辨當袋を壁地から取出して、大きい方のバンミチーズをハイディの側に、小さい方のバンミチーズを自分の側に、二つ宛四角形に置き、白い山羊から乳をお椀に搾つて、それを四角形の真中に置いてゐた。それからハイディを呼んだが、ハイディは新しいお仲間の元氣なあそびに夢中になつてゐて、ほかのことは何にも聞えも見えもしない。それでペーテ

ルは山羊を呼ぶよりも骨が折れた。けれども思ひ切つて、上の岩にこだまする程な大きな聲を出して呼んでみると、ハイディもやつこ姿を現した。
そしておいしさうにならべられた御馳走を見るといでその廻をスキップして廻つた。

「お晝御飯だから飛び廻るのはよしな。坐つてお

あがり。」

ペーテルに云はれてハイディは坐つた。

「このお乳、わたしの？」

ハイディは、お椀を中心の飾にして、きれいに四角にならべられた御馳走をまた嬉しさうに見て尋ねた。

「さう。それから大きい方のパンミチーズも君のだよ。そしてその乳を飲んでしまつたら、もう一杯、白い山羊から搾つてあげるよ。おうしたら僕の番だ。」

「ペーテルのお乳はきの山羊からくるの？」

「僕の山羊からさ。あのどちのだよ。だが、さつさうおあがりよ。」

「ハイディがお椀を手に取つてお乳を飲んで、それを空にして下に置くと、直ぐまたペーテルはそれに一杯注いでやつた。それからハイディは自分のパンを一きれ裂いて、残りを、残りと云つてもペーテルのパンよりは大きなパンのきれを、それに大きなチーズをそつくり添へて、ペーテルにさし出した。

「これ食べて。わたし澤山だから。」

ペーテルは驚いて口が利けなかつた。自分だったら、自分の物をそんなに人にやるなんて、みて出来ないこことだつたらうから。初めはハイディの云ふことが本當に思はれなくて躊躇してゐたが、ハイディがいつまでもさし出している、おしごにはそれを自分の膝の上に置いたりしたので、さては本氣かと思つて、それをもらつた。そしてうなづいて有難うをして、山羊飼ひになつてから一番のおいしいお辨當を食べた。その間、ハイディはまた山羊たちを頻りと眺めてゐた。

「山羊たちの名前をみんな教へてね。」